



Title	国民社会の研究 第3巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1959-02-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78348
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集7(国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である(同書内での言及による)。
File Information	1006_013.pdf



[Instructions for use](#)

6

NOTE BOOK

*Best ruled foolscap
For colleges and universities*

國民社會の研究
第三卷

昭和十四年二月九日

YAMATO

地方行政の史的意義

人口と生活の断続

人口

自己行政としての個人と家族と

村落と都市と人口統計 (2)

生活の本質

人口と社会の社会的文化的交流

人口と社会の政治的階層

統治者階級と国民階級の中子に存する官僚階級

統治者の存在を充分に認識する事

人口と社会の直接生活圏

人口と社会の生活圏

人口と社会の生活圏

人口と社会の生活圏

人口と社会の生活圏

人口と社会の生活圏

人口と社会の生活圏

人口と社会の生活圏

地方行政地区の社会的意味

地方行政地区は行政上の方便上の使
用の為めに設置されるものである。
方便の村街が逐めは廢止したもの
である。

百家の断続

内閣が変遷するに百家が変遷するとは至らぬ、
けれども王朝が変遷するに百家が変遷するは
至らざるであらう。内閣が変遷して行政機關
とその人的構成は変遷しない。けれども王
朝が変遷すれば行政機關もその人的構成
も変遷するであらう。行政機關とその人的
構成が可変官僚を形成して行く。
官僚の沿革は百家の沿革である。
王朝の沿革は官僚の沿革を伴ひ
内閣の沿革は官僚の沿革を伴ひ
行く。百家の生息と意志は官僚
と共に存続するものがある。

木下尚江 百家 P.47 P.51

□土

□土は□家に依つてはなからず、これともし□

土の完全保有なしには主権の絶対的

発効は不可能とす。故に主権の

完全統治の實行は□土はなくてはな

らざるであらう。□民の存続は□土を

か他の□家に保有せしむる時は

他の□家の発効によつて主権の統治が

絶対性をもち得なくなるからである。

然し主権の絶対支配と云ふものは、

□民の絶対屈服と云ふものと主権の

ありて主権の支配が浸食せしむる絶対

屈服があるは、それで主権の絶対

物は存し得るのである。主権者を
拘束する力がある。これ口民が絶対
服属して兵以上主権は絶対的だと
云ふ事は出来ぬ。主権が絶対的
であるのは口民に対する国体が絶対
的であるから。特に口民が絶対服
属せざるを知らない主権の力の
有るものだけか同様に云ふ。こ
この意味から云へば口土なき地
にこれ口民を絶対服属せしめ、
それは可能か否かの事案の同様に
云ふ事は出来ぬ。従来は口土なき地

定む。

口土と口民は一体で、主権が色
々な家々、主権と共々官僚の家々。
時、口家は清之也。口民は口土の
上に生之て居る植物と同様に口土
に根をおろして居る。口民も口土の
上に生之て居る。口土も口民も。

口民の中の一層強力なものが他の
口民を屈服して居服せしめるの
情態で永續さして居る構へが政
治である。口家の構成原理で
ある。主権を一人で持つて居る場合

6

しや、大勢を扱つて片の場合である。

7

生知の所謂本能の在る南作の自己
 生命の活動は自然環境の対して
 生命の活動は自然環境の対して
 生命の活動は自然環境の対して
 生命の活動は自然環境の対して
 生命の活動は自然環境の対して

自己防衛体としての個人と
 家族と村落と都市との関係
 (1) 民族

(一) 自己防衛体としての個人は我である。

我は本能的に生命の存続を成す
 を無條件に是認し其の為に活動

する。自己の生命の存続を成すに危
 険を伴ふ。一己の存在に互換し抵抗

し敵対し自己の生命を防衛す。

一己の生命は皆かくるべき性質を共

有して居る。

(二) 自己防衛体としての個人が防衛

協力体を作る第一の衝動は家

△ 知しこれは自己防衛力のなる乳母に
対す。母又は親の一方の防衛である
共同防衛とは互へない。母又は親の乳
知し対す。産後の子はと云へる。
△ 知しこれは自己中心的な防衛であつて
協力と云ひ難い。か否か明確ではなへる。

族である。乳母と子又は親と子
の協力係は哺乳動物の世多にもあ
る。△ 雌雄の一致は初期の真つて一つの
共同防衛係を作す。其他の生物にも
見られぬ。△ 病人や老人を^{家族}共同防衛
係の中心にして居る生物か人間以外
^{どの種にもあるか}にてもある。か否か未だ知らぬ。△ 恐ら
くこの秩序に入った段階で人間の家族
は生物学的な家族的生存と隔絶す。
のとはなつか。

△ 知しこれは人間の行為では老人や病人
の保護を以てる。共同防衛に比して何れ

か有して是るか、何れも民族も一序

は皆この段階即ち老人也不是也病

人をもつ家族共同防衛体、六人九

子休了子休、あらう。人間の家族を

い家族、五、二、三、と、是、は、力、也。

夫婦家族の形式は、い、か、一、歩、前

進した形式、と、い、は、い、は、よ、て、あ、ら、う、か。

人は、直、系、家、族、の、形、態、の、内、に、い、ま、

その、一、部、の、変、化、を、つ、か、し、た、と、い、は、

い、は、よ、て、あ、ら、う、か。

三人が家族の次に形成した防衛

協力体は、相、協、て、あ、ら、う。我、夫、妻

10

と子夫妻が遊藝して居候しなり是れ
當り弟夫妻が遊藝して居候なり是れ
近親者の家種が近隣をなして
金持し^始た事か村落^の死存形成の端
緒を同^のたてある事。今も村落の
死存に懸つて居る同族の結束に因
依して^の村落の死存文化が村落^の死存
成立の始の^の同族結合に系を
おいて居る事かどうかは全く
不明である。
としかくし村落^の死存^の文化
が同族の社屋であった事、同族死

今と村を区別するものは強と弱か
元可は元か下なる。

狩猟時代、採集時代、遊牧時代に

おいては即ち土地への定着が有るなか

らに同じ民族の結合は有して片

た下なるか。是れは細いかに村

は政は水と所帯から。民族を定便

を治した時互の時に村は政を

た下なるか。村落は何れもは定便と

元可は元か下なる。

ケルマンヤが書かれ元即ち西紀一三

紀の頃のケルマンヤは解は豊稔を

居位形式は

上下居位を以て散居と志す。ザレコフは
元五に三ヶ年が経過するに於て居位は
大體不変。然しガル部はソコ散居と
密居と云ふ事は水中種大に存同化し
たより重かた知れぬと長以ては私に
思ふ。之は、^{要途} 社会的交流の可能性が
ある。狩獵も採集の爲には散居
が都合かゝつたにあり、群をな
し侵略して居るゝ外敵が攻はれぬに
対応す。各人の地位も定居的に
漸進進んだであらう。

密居の村落は共同防衛の必要

此處にて漸次國定して来たてあがり

人は皆村落の内は住し村落を界

位として政(四)府の中はし2片を併せ

是の了つていふであらう、云はは村

落口系の時作らる

(四) 郡も強き方を村落口系か附近の

村落を知伏し居住し、持續的に居

住の地然におくはなり、政治かおなり

権柄と統治 女不三り、その強弱を村落は

統治者、支配の中心を有し、重級者かるこに

定時に集まる、他へのに、下あらる。是

しるることを都市を急増する、語るよ、と叫

おん王^たた^てあ^らむ^と 都市の象は

その標^しし^て先^にした^てあ^らむ^と

然^しし^て都市を^定め^るせ^しむ^る勢^はは^るこ^の

に^統治^の中^心が^生じ^られ^るよ^うに^なる^に

他の^村落^にも^その^名を^知る^にあ^らむ^と

の^居住^地も^村落^や市^場へ^から^なる^にあ^らむ^と

人^がそ^のに^他の^村落^{より}自^らなる^にあ^らむ^と

施^せる^にあ^らむ^と 村^落が^都市^と

な^らな^るに^あら^むと^して^村落^{より}区^別さ^れ

と^して^した^にそ^の他^の村^落も^あら^むと^し

村^落が^共同^的な^形体^であ^るに^あら^むと^し

に^都市^に共^同的^な形^体の^中心^をあ^らむ^と

我口

じて居るの者然であつて、恐らく近世

に入つた直前の比するに口内の治安は充

分であつたとしても、都市口内

都市は何等の都市の都市も

市場の都市も是の口内住する人

は常に共同防衛の義務がある

と考へて居る者

(五) 次の政治的共同体防衛の体は

口内政治である。口内政治的都市の

より成る。口内政治の都市の

による。口内政治の都市の

政治は他の世界より封鎖された口内と

口内政治

口外との間に高い障壁が設けられ、
何れも口民社会も強固な社会的
殻に包みこまれ、口民社会を單位
として攻取られしむ。甲より乙へ世界の
戦状である。

口民社会は一体である。となつて攻
めたり、~~口民社会~~ ^{口民社会}の守りなげなげな
存続の戦い。規定されし口民社会
が他より独立した民族的な工業や
文化や其在を保有し、是に在る限り
その存続の定型的な交渉過程
も有する。是よるは当然である。

生活の本據

物質

精神

一生活の本據としての住居と家族

二生活の本據としての事業場

三生活の本據としての国民教育

自我の拡大過程

（住居を守護して其の家族

を住居を守護して其の事業場を

住居を守護して其の（長教育

事業場を）

人同は七早や衣服がしは先き

お中なくなつて居る。又塩分を食

可食いでお先きするに困難である。

人は其の意味で社会を仲間として

居る。其の仲間としての家族

今日でも口家の治安が乱れつつある
 直ぐに軍人は軍隊を軍隊として
 共同防衛隊共同救護隊等
 成すべきである。
 政権の革命の毎に人は何処
 となく軍隊記念を奉祀して政
 府すよゆ軍を軍隊として奉祀す
 べきである。中央の民族の革命
 が成すより以前にも民族は又
 以て好むに相背して云んなゆ
 かに思ふたである。可成り軍が
 強固な結束であるのゆえに
 かくして人はあつた。飛騨陸軍
 である。

14
 # 次は軍隊記念(防衛隊として)
 次は軍隊記念(防衛隊として)
 然し軍隊記念の口家
 可成り軍隊記念の口家
 口家なく口家記念の最後方
 が各所に口家記念を奉祀して主権
 を支えんとす。配給法す。の
 大陸の口家と関係は日本の如く
 島口の口家は主権を代表す。
 上意の人の時は永久に同族を
 組織の先を確立する。因に恩愛也
 衆が其の巧みに悪用さる。強
 度と其の巧みに悪用さる。強

レーンが、その契機として口宗成立の
起原に於て自申な多岐を口民が取
りしこととするを論じたのは右の如き
島口口宗に最もよくあらはさすである。
之は素朴に於て、反逆的なき村を
もつた、その口宗内に居た事以上
その口宗でない事を知る事ある條
ない。
彼等は、その契機たるは五の口宗
の底層の下にあり、その口宗の
底層中には存在し得ない。
彼の宗族は五の口宗の有りし

五の口宗の底層を以て生存有
し得ない。彼は五の宗族の底層
を以て生存有し得ない。かくして彼は
彼の口宗の底層を以て生存有
し得ない。

人は生命を有するものの本来的な性質も
も、自分の生命を愛する。次に自分の
生命に最も大なる同情をもつて居ると
二の一人と物を愛する。最も大なる同情
をもつて居る人は宗族又は同族團體に
あり。又最も大なる同情をもつて居る
は財産である。自分の生命及び最も

大切にする人と物とは何處に集まるか

片も。故に人は何處に居るかは其の

安全の為に努力せしむるの覚悟を期す。

吾の安全を破るものは天災と人災である。

天災と人災に對して何處の安全を期

すべしは常に有し神の心を以てなすべし。

居候の安全を期すべしは近隣の人

と安全を期すべしは近隣の安全を

期すべしは近隣の安全を

期すべしは近隣の安全を

期すべしは近隣の安全を

は可成高き路を以て平安を以てす

有條件とするべし。此経路の上には

吾も。果物路の平安は口衆の

平安と強大の中にこそ之を以て期す

されしを以て其は当然の道へてす。

口衆が平安は故に口民路が

平安を以てすの念は人は自

己の生命の平安を以てす

の当然の発展である。一人は其の

能く皆かゝる如き心構へを有して

居る一隣の人回が形成して片は

か口民路である。

口民啓蒙の社会的文化的交流

口民の一人くが口の中心に連結さ

れ、その必要は口民の側からよ

りし、口民の中心がこれを必要とする。

何と云わば、口民及び口民を防禦

する必要から中心は口民を防禦する

防衛の必要を知る必要がある報告を

受ける必要を調査し、その必要を

示す。口民の調査は口民の調査に對し

て、調査の進行の排除したる程度が小

さるべきである。保安官を派し、その

調査を派し、その調査の進行の程度

を調査し、その調査の進行の程度

施設

。交通通信の整備は口宗統治

に絶対に必要である。

此は行政機関に趣くの任命様を以て

總罪をおさるべきからである。

行政的交流に於いては統治者自ら

統治への一方解を流わがなくては

に生業における交流は主として商

活節における交流である。商号を

地より得た水と雨を蓄す。各地

何長に販賣する。と云ふのが互の形

の形である。その高き過程に

おお聲の如やデパートや専門店

各種の取引担当者

般に云ふと、行商人等との別はあるが、これは昔態に於て、便渡的を以て、通商の爲め。

物價の概集め、連絡、此も通商交通、運搬等の活動が対象である。

場の高人が種子、島に鉄錐を仕入れ、此行の時は命かけておられた。

たぐし、高魂は、昔新多島、同様の仕入れの爲め、どんな遊地にも、どんな危険を犯して、散財と活動する。

又、時や處の異なりによる、高島、の價格の差異は、仕商人は最も敏

利権のありは

感であるから、財と力を之を之うば、すめ何な
困窮を以て支那とて高名又は原料
の仕入の爲に東奔西走す。五のこ
は、予昔も大なるれば大なる文化知
範圍は、愈々大は世界各地を以て
かけおは、一町村の内を活動す。○
然し人及び物の流入流出に於て
口境の線は、其下鋭敏不あるが、
口境の線は、其より其尤少く
一般に口民社会、故に交流の
圏は、固く之片也。

今日では工業の原料は工業者自

身で蒐集するが常である。本来は
は五十年^也商人の活動である。本来的
に工業家か、求めざる種は商人が主
集して是れを工業家に譲り、工業家は
之れに加工して製品を商業家に譲り
商業家は消費者に譲ると云ふ形で
ある。けれど今且工業界は之の末に商
業家の活動も自ら学んでゆく。
今日では大メーカーは国民の一人一人の
居位まで物販の店を兼ねる。同時に
販賣も学んでゆく。

商業は工業家の活動は商販販賣

の面、口内の中央より、束縛に正正交
流を精粒の行、二片、。

口内部分の交流の最も大なる流量
の二つは高し工業に對する原料、又は仕入物資
と商号の運搬と其の爲の通信に
あつたりは昨より、ありたり。口内の
文化を看一化す。是れは大なる活動
と高し工業者の活動によるものと見
はゆら。

行路及び高し工業の活動による。交流に比す
れば教育、学教者の活動はより、交流は
物の教下とありたり。然しあると、親い

文化現象の
交流量の
測定

都市としての
都市の異作
的表明

のは、都市間の交流である。

然し、その各種の文化的交流の進化に

ついて、その進歩について、（数値を

明らかなすべし、（数値の

その数字によつて、（又は割合） 民は、何のうに

最も多量に交流して、（又は割合） 最も

多量に交流する。

郵便物の取扱ひ数量を各都市、村、町

別に調べ、その数量を大市の長に比べてしり

本地国の長に記入すれば、都市の大小別に

度、（又は割合） その長の大か、の配列となり、（又は割合） 結果

として、都市の配列が、（又は割合） 実際に分るであろう

（又は割合）

（一）民間生活内における階層。

日本では^{最上}に皇室の一種の階層が最下位に機多の^{一位}一種の階層があつて久しく慣習的に最上位は威光あふしの位に思はれ最下位は卑賤のもの位に別れなす。是れその中では所謂常民であるが常民の中では職務と収入の上下が社会の地位の上下を決定する様である。職務^{又は}地位^{の収入}は勤続年数が主たる決定因子である。又肉体労働より精神労働が高位と認めらるゝのである。女より男が高位と認めらるゝ

統治又は政治は口境外には
無力である。

政治が口境外には無力であるが
階層又は階級は口境外には
有力である。また、口境外には
有力であるが、口境外には
無力である。

32

統治者群といふ民衆の中子に
存す。官僚群の存在を充分
に認識す可き事あり。

下の七種の生活圏の中村茨都市にお
 となく同姓望のものは家族世帯あり、
 同居関係のみである。然しこれとせ
 都市には同居関係として構わぬもの
 あり、村振にかける家族の一色と異なり
 世帯の大部分は家族である。互り下を
 いはれり都市には多し。

口良祝念心^内に於て直接生活圏(習俗)

一、家族世帯(同居関係)

二、近隣(村には近隣関係都市には自治近隣)

三、子供の遊伴(都市中同じ但し親の
 生活には階層差の巨額)

四、学級伴(右と同じ)

五、村内

六、職場(都市に於ては)

七、娯楽伴又は友人(都市中同じ但し
 階層による生活の巨額)

右は人が人同の休養を互いに感した

が、社会的に接觸する。認めらる。愛憎は

の感情も合致打算の現物も並存して

交はへり、社会あり。生業の位度心

⑥ 下等の場合、令嬢Aとその店に買入る
に事工人との接觸

ついでに人は直ちに体遣を失ってしまふ。

先の七つの生活圏以外にあり、親に人か

他の他人と交るに接觸するのほた

カセの圏を伴介として人同様に

接觸する場合、即ち子供、AとAの学務

又、仲子の老との接触、又は老妻の親、又は老仲

子の人との接觸、又は老子、又は老弟、又は老二に

人が、又は老生業の層に立って、又は老未知の人と接

する場合、又は老及、又は老生業の層に立って、又は老了

人との間に立って、又は老接觸、又は老何へは商店の

店員から買入る物を、又は老場合、又は老彼ととの

者、又は老との接觸、又は老及、又は老い、又は老Aが令嬢として

3.4

あつて他部行多し取引よきして格闘
する場を、以上の格闘かその終つ
て了る。(人と人、人と格闘、格闘と人
又人は様(同)と格(同)の四種の同位
人と人との同位は、おのせつな生活圏
内を統一する是れも同位であるが、
人は身と他然の格闘は人と人の
同位を作らざれば、洗車の中
話した、人と人、君の名ははしの二人
は互いに名も知らぬ二人である。人衆は
は互に名も知らぬ二人である。人衆は
は互に名も知らぬ二人である。人衆は
は互に名も知らぬ二人である。人衆は
は互に名も知らぬ二人である。人衆は

その先づかゝるべきこと

能はる先ん述べたる七種の生活圏は
人と人との関係に於て政治的
居るといふは、社会学として示したる
也。

一、山村の場合は大衆の例
二、都市内は一俵屋市場の例
三、都市の周辺は琴江の例
四、大都市圏内の場合は柏江の例
五、大都市中心街の場合

大規模な交通の生活層、亦を元々とするは
向きの口の中に向って近よるより上の列車に
向きの口の中に向って近よるより上の列車に

口民衆層に於ける三つの生活地区
第一生活地区、第二生活地区、第三生活地区
をその内側地区の構図より充ちして
見よ地区

第一生活地区、第二生活地区、第三生活地区
は、高層の生活の必要とする地区
内の構図より充ちして見よ地区
亦三層生活地区、最大の規模の又は
希望を得、高層の生活の必要を
は、娘の結婚の用度(をその地区内の
構図より充ちして見よ地区
例へば大衆の住民として見よ

生活地区は大規模第二生活地区は
田代第一生活地区は弘法寺である。
右の村落を延長して考へた場合の生
活圏である。大都市圏の住民はこゝに
考へれば、その地区は何れもその大都
市圏に属して居る。

中や都市圏の住民の場合都市の
近郊~~域~~住民の場合に於て、その
地区の配列はその形態を異なるに
居るが、原則は同一である。

□土の外形

□土の中心に政界と牛の市民の生活
の中心が具体的な形を呈しては
第一に居住のための建造物、第二に
交通通行のための設備や利便
を~~中心~~^{中心}に生業のための仕事場が見
えられ、第三に教育と娯楽の施
設が有して居る。

□の中央より交通通信の網の中心
□土の全部を散らばら~~ば~~^ば網の中心が
中心より遠ざかるに従って~~網~~^網の中心が
より仕事場も住宅も少くなる。

三つの生活経験の世界

自分が一番よく知った人は自分である。常識よく知った他人の一群は家族である。家族以上に自分が又自分を知った人は

家族である。自分には遠くまで知った人を知った人の中自分が最もよく知った人の一番多く集まる所の人は自分を知った人である。同様にして他の口民の中知った人か一番多く集まる所の人は自分の口民である。と云ふ事は自分の生活経験の世界といふ是等の事である。家族は又は所及い

前である。

口民である。他の口民や村や家族は自分の前身すよものよりの類比によるものである。他の人の家族も自分の家族と同様である。たゞしは世界中のどの一人人についてもいひねるものである。

家族の生活は家族で一人の生活と

劃然と異なり、金銭に關しても家族に對しては異なるのである。他の人口の國は峻崖を記すの如きものである。新入水は人々

自由な社会的交流は口境の線に集って
完全な停止である。社会的交流も文化
的交流も口境の線が強い拒否を
示すのは容易である。拒否は

43

1971

